

人も街もアツかった!

「銀座区」の祭りに密着

祭り本番まで1カ月を切る頃、各地区で祭りの準備が本格化し始める。お囃子の練習、山車の準備、そして祭り本番の3日間まで、銀座区のお祭りに密着。そこから見てきたのは、暑い気候に負けず劣らぬ、熊谷の人々の祭りへの情熱と誇り。やっぱり熊谷はアツかった!

梶をとる新島章夫さん(右)。笛を吹くのは息子の崇史さん(左)で父の跡を継ぎお囃子を指導している



7月上旬 お囃子の練習

毎年、銀座区の小学6年生から希望者を募り、40名前後が初めてお囃子に参加する。「もっと音を揃えて! ひとつひとつの音を丁寧に!」。厳しい指導、慣れない太鼓と正座に四苦八苦しながらも、バチを握るそのまなざしは真剣だ。



指導をする崇史さん。「地域の祭りの伝統を子どもたちに伝えたい」

7月中旬 山車の準備

祭りの約10日前、章夫さんを中心に20名ほどで銀座区の山車の飾り付けを行なった。山車庫から出した山車を掃除し、幕や幟旗、人形、提灯などを取り付けていく。祭りに向けて華やかな装いとなり、熊谷の街全体が盛り上がりつつある。

見返り幕や車輪の絵など、山車全般のデザインを手がけた章夫さん



① 笛はおもに高校生以上が担当。小学生以来、参加し続けている人が多い ② バチの持ち方、腕の動きも身につけていく



① 熊谷次郎直実の人形は約1m50cm。全体で高さ約9mになる ② 1994年に作られた山車。唯一、装踏(もこし)がついているデザイン



7月20・21・22日 祭り本番

20日朝6時過ぎ、愛宕八坂神社を参拝し熱狂の3日間がスタートする。各町区の山車や屋台が街を練り歩き、星川沿いを中心に露店が軒を連ね大賑わい。お囃子の叩き合いは事前に場所と時間を調べて見に行こう。



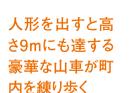
銀座区の山車の最上部から熊谷次郎直実の人形が見下ろしている



熊谷駅前や、お祭り広場に12台の山車・屋台が集まり、「曳き合わせ(ひっかわせ)叩き合い」が行われる。山車の先頭部、梶棒台には総代たちが居並んでいる



見得を切るようにバチを振り上げポーズをとるのも熊谷囃子の楽しさ



人形を出すとき高さ9mにも達する豪華な山車が町内を練り歩く



くわがたねじりに提灯をもつ粋な女性たち

アツい 祭りに欠かせない「給水車」にも注目!



山車の後ろには、祭りにあわせて山車仕様の給水車を配置。いつでも水分補給できるようにするほか、提灯にはミストが出る工夫を施し暑さ対策も万全。

熊谷がもっともアツくなる3日間 熊谷うちわ祭 7月20・21・22日

絢爛豪華な山車と屋台が通りを練り歩き、大音量の摺り鉦が熱夏の街に響き渡る——毎年7月の3日間、盛大に行われる熊谷うちわ祭。普段はおおらかな熊谷人が熱狂する3日間だ。



提灯やぼんぼりに明かりが灯り、華やかな山車が夜に浮かび上がる。12台の山車・屋台が扇形に並び、勇壮な叩き合い、カンカンという摺り鉦の音と太鼓の音、歓声が混じりあい祭りは最高潮へ

なぜ「うちわ」祭?

かつて熊谷の祭りでは、見物客に赤飯を振る舞っていた。明治中期になり「泉州楼」という料亭が、赤飯の代わりに洗うちわを振る舞ったところ評判を呼び、各商店もうちわを配るようになったことから、「うちわ祭」と呼ばれるようになった。

現在は奉納うちわが配られ、アツい祭りに涼を運び、気持ちを癒す



7月21日



7月20日



7月22日

① 7月20日、ご祭神である素戔鳴尊(すさのおのみこと)または牛頭天王(ごずてんのう)の御霊を神輿に遷し、本宮(愛宕八坂神社)からお飯屋(かりや)へと運ぶ「神輿渡御(みこしとぎよ)」。祭りの始まりを告げる儀式で、各地区の高が神輿を担ぐ
② 7月21日、祭り2日目、歩行者天国となった国道17号を、八坂神社の宮司や年番町の大総代(その年の祭りを統括する者)らが列をなして歩く巡行祭
③ 7月22日、3日目、年番町を引き継ぐ年番送りのセレモニー

名物ともなったこのお囃子の立役者が、銀座区の新島章夫さん。10代の頃から独自にお囃子を叩き始め、市内で一番早くお囃子会を発足。今では地域の子どもたちにお囃子を指導するほか、祭り当日には山車の真ん中に座り梶方を務める。「祭りは地域の人のためのもの。俺たちの祭りだ」という誇りがある」と新島さん。銀座区でお囃子会に参加できるのは、小学6年生から。子どもたちは、「6年生になったら絶対にやりたい」と思っていた。お囃子は小さい頃からの憧れと目を輝かせる。アツいDNAはこの地でしっかり受け継がれている。

毎年、梅雨明けの知らせを聞く頃に行なわれるうちわ祭。地元熊谷の子どもたちにとっては「夏休みとともに始まる、ワクワクするような3日間」でもある。夏の厳しい暑さで知られる土地柄。身体も気も弱らせるような暑さと悪疫を払うことが、熊谷の祭りの発祥といわれる。文禄年間(1592年)に京都八坂神社を勧請し、現在の鎌倉町にある愛宕神社に合祀してからは、八坂神社の例大祭として発展。時代を経て独自に進化した祭りは、今や3日間で75万人もの集客を誇る一大行事となった。うちわ祭といえば、12カ町計12台の絢爛豪華な山車・屋台の巡行と、お囃子の叩き合いが華。とくに最終日、お祭り広場となった十字路で行なう、12台勢ぞろいでの「曳き合わせ叩き合い」は迫力満点で、祭りのクライマックスだ。

260年以上続く 熊谷で生き続ける伝統の祭り

毎年、梅雨明けの知らせを聞く頃に行なわれるうちわ祭。地元熊谷の子どもたちにとっては「夏休みとともに始まる、ワクワクするような3日間」でもある。